

幻虎錄



陶 易 王

胸が苦しい。何かしら重いものが乗つてゐる。首をもたげてみると、毛むくじゃらの太い手が乗つている。猫の手にしては大きい。

大きこ」と思つたら、生臭い息が顔にかかるべ

ると舐められた。

さよつとして見ると、これは虎ではないか。JUNIORの喉をならして顔を擦り付けてくる所は大きな猫である。舌がざらざら触れて猫みたいだが、虎に間違ひは無い。

書意はなぞそうだが、どうして虎がこんな所に顕れるのか。死んだふりをすればいいのか？

だが恐ろしい。急に気が変わつて噛み付いたらどうし

よづじつとして立ち去るのを待つ。と、風もないのに裏庭の籠數が、がさがさ動いた。そしてキュウキュウ鳴き声がして、小さな子虎が二匹這つ出して来た。母虎

を認めるときつすぐ走つて来た。

一匹がすぐ腹の下に入り込んで、乳に吸つ付いた。もう一匹が何を思つたのか私の胸に乗り、鼻で寝間着を搔き分けて私の乳首に吸いついて、出ぬ苦が無い乳をちゅうちゅう吸い始めた。

痛い。おまけに両手で胸を押され、今更に乳もみをするべ

すぐつたくて痛いから、手を伸ばしてトトから子虎を持ち上げる

る。後ろ足でぽんぽんと跳ぶ。子猫と同じである。

虎から逃れるチャンスをつかがつてみると、遠くの裏山の寺で鐘がボーンと九回鳴った。

虎はむづくじ起き上がり大きな欠伸をすると、山に向かつてのそのそ歩き出した。

乳を吸つていた子虎はお腹からJUNIOR振り落とされ、後ろをひょこひょことついてゆく。

ほつとして起き上がりついたが、金縛りにあつたみたいに動けない。

その時、山の上から鐘の音が聞こえて眼が覚め、思い出した。

寺の住職が飼つていた虎が山に逃げ込んだと言つ事件があつた。あの虎に違ひない。

ベッドから落ち、すつかり眼が覚めて思つた。幻の虎は生きていたのだ。

(ア)